

カムチベット語燕門・斯嘎 [Sakar] 方言の文法スケッチ

鈴木 博之

キーワード：カムチベット語、雲嶺山脈西部下位方言群、格体系、動詞接辞

[要旨] 本稿では、中国雲南省徳欽県燕門郷施拉行政村で話されるカムチベット語斯嘎 [Sakar] 方言 (sDerong-nJol 方言群雲嶺山脈西部下位方言群) の音声・音韻および形態統語論の簡便な記述を行う。後者については、特に格体系と動詞句周辺の接辞を中心に述べる。

1 はじめに

中国雲南省迪慶藏族自治州徳欽県西部を中心に話されるカムチベット語 sDerong-nJol (得榮徳欽) 方言群雲嶺山脈西部下位方言群に属する各種方言¹は、音声方面において多様な異なりをもつ方言群であり、少なくともこれらの特徴に基づいてさらに下位分類することが可能であると見込まれる (鈴木 2010)²。このうち、本稿で記述する燕門郷施拉 [Thang-la] 行政村斯嘎 [Sa-dkar] 自然村で話される Sakar 方言は、燕門郷政府以南の施拉村および瀾滄江をはさんで対岸にある春多樂 [Chu-mdo-ldug] 村、茨中 [Che-grong] 村、および南接する維西県巴迪郷の諸方言とともに、1つのグループを形成していると考えられる。これまで筆者は Sakar 方言の音声分析を提供した (鈴木 2010) が、形態統語の記述はまだ提出していない。

斯嘎村に居住するチベット語母語話者の普段の言語使用は、ほぼ土地のチベット語方言を用いて行われ、必要に応じて漢語の使用も見られる。大部分の村民はこれら二言語を併用する。このため、Sakar 方言の使用環境はきわめて良好な部類に入ると考えられる。また、斯嘎村のほとんどの村民は互いに親戚関係にあるという。呉光范 (2009:370³) によれば、斯嘎村の人口は 173 人で、この数を狭義の Sakar 方言の話者数と見積もることができる。なお、施拉行政村全体では 1144 人の人口を数える⁴。

本稿で用いる Sakar 方言の言語資料は、筆者の現地調査で得られたものである。主な調査協力者はスナン・ツモ [bSod-nams mTsho-mo] さん (女性) で、調査は主に香格里拉県建塘鎮で行った。語彙調査および文法調査ともに漢語を媒介言語とした翻訳形式を中心に行い、自然発話における用例の観察は斯嘎村で行うとともに、香格里拉県城でも同郷の人との会話を中心に

¹ 方言区分については鈴木 (2009b)、Suzuki (2009a:17) を参照。雲嶺山脈西部下位方言群に属する方言は、現段階では徳欽県升平 [ʼJol] 鎮、雲嶺 [Lung-gling] 郷、佛山郷、燕門郷および維西県僳族自治県巴迪 [ʼBaʼ-sdod] 郷に分布する。

² しかし現段階ではいくつの下位分類が成立するのかは判明していない。

³ 2005 年末のデータに基づく。

⁴ 狭義の Sakar 方言は斯嘎村のみで話される変種と定義しなければならない。この意味で Sakar 方言は、たとえば隣村の Yethong (頁通) 方言とは若干の異なりを認めることができる。

用例を収集した。その際には、スナン・ツモ [bSod-nams mTsho-mo] さん（女性；通称 Selena）とチェガ・ラモ [bCo-Ingā Lha-mo] さん（女性）の協力を得た。

本稿の構成は、大きく I. 音声・音韻、II. 形態・統語と分けるが、各節は通し番号にしている。内容は Sakar 方言の記述に的を絞り、近縁方言やチベット文語形式との対比という観点からの分析は行わない⁵。なお、形態・統語についてはなお詳細な分析を必要とする部分が少なくない。これについては、稿を改め行うことにする。

I. 音声・音韻

音節構造、超分節音素、母音、子音に分けて述べる。

表記には音標文字を用い、IPA のほか朱曉農 (2010) に定義される音標文字と鈴木 (2005) で用いられている表記法も断りなく用いる。

2 音節構造

2.1 最大の音節構造

Sakar 方言の最大の音節構造（分節音の配列）は、鈴木 (2005) を参照して以下のように記述できる。

$${}^c C_i G V C C \quad \text{および} \quad C C_i G V C C$$

このうち C_i （初頭子音）と V （音節核の母音）が必須であり、 $C_i V$ を音節の最小構成とみなすことができる。

末子音が2つ続くとき、最後の要素は /ʔ/ である⁶。G（わたり音）と末子音 CC は共起しない。これに超分節音素として声調が加わって実現される。ただし声調は語単位でかかる（3 参照）。

2.2 具体例

以下、各種分節音の配列について、それぞれ1つずつ例を掲げる。

c	C_i	G	V	C	C	具体例	語義
	C_i		V			ˈtɕʰaː	雨
	C_i	G	V			ˈpjẽ tʰu	ひざ
c	C_i		V			ˈfi du	石
c	C_i	G	V			ˈhkwõ ma	足
C	C_i		V			ˈmbə ʰtaw	火箸
C	C_i	G	V			ˈmbje	消化する
	C_i		V	C		ˈnãw	空

⁵ Sakar 方言における主要なチベット文語形式との対応関係は鈴木 (2010) が記述している。

⁶ 末子音の CC の第1要素は半母音である。そして G（わたり音）の位置にも半母音のみが現れうる。これらの位置に現れる半母音は母音の一種と解釈し、二重母音を認めるといふ分析も可能であろう。

	C _i	V	C	C	ˆtawʔ	滑る
	C _i	G	V	C	ˉtʷoʔ	6
C	C _i	V	C		ˉ ^h kaj nāw	流星
C	C _i	V	C	C	ˉ ^{fi} gawʔ	かぶせる
C	C _i	G	V	C	未確認	
C	C _i	V	C		ˈmbəʔ ts ^h ow	こぶし
C	C _i	V	C	C	未確認	
C	C _i	G	V	C	未確認	

各種音節構造はその出現頻度に大きな異なりが認められ、CC_i型や末子音 CC型はあまり見かけない。

3 超分節音素

3.1 声調とその表記

Sakar 方言の超分節音素はピッチの高低による声調として実現される。声調パターンとして、以下の4種が認められる。

ˉ : 高平 ˊ : 上昇 ˋ : 下降 ˆ : 上昇下降

声調は語単位でかかるが、最大で2音節を単位とし、3音節以降は低平～中平のピッチで発音され、弁別的でない。声調のかかる単位の中には各種接尾辞類（格標識、名詞化標識、動詞接尾辞など）も含まれるが、接頭辞がある場合は接頭辞の声調パターンが語全体の声調に影響し、必ずしも中核的な語の声調が維持されるとは限らない。

以上の声調記号は語（または音節）の初頭に付される。

3.2 具体例

以下に1～2音節語の声調の具体的な現れを示す。[]内には各音節の分節音をSで代表し、その右肩に調値を5段階で表示する。

	高平	上昇	下降	昇降
1音節語	ˉmɤ [S ⁵⁵] 「虫」	ˊmə [S ²⁴] 「人」	ˋmə [S ⁵²] 「2」	ˆroʔ [S ¹³²] 「友人」
2音節語	ˉ ^{fi} mə ^{fi} ma [S ⁵⁵ S ⁵⁵] 「低い」	ˊmə ^h tow [S ²⁴ S ⁵⁵] 「花」	ˋ ^{fi} lje: pa [S ⁵⁵ S ³²] 「脳」	ˆməlje [S ²⁴ S ⁵³] 「軟らかい」

以上に示した調値は、初頭子音によって若干異なりが現れるが、弁別的ではない。声調は型が弁別的に作用すると考えられる。

4 母音

4.1 母音の舌位置による一覧

Sakar 方言の母音の舌位置による一覧は次のようになる。

i	u	u
e	ə θ	ɣ o
ɛ		ɔ
a	ɑ	

調音方法に関して、特に必要とされる音声学的記述は以下の通りである。

- /ɛ/ 舌位置は [e] またはそれよりやや広い [ɛ] と [æ] の中間になる。
- /a/ 複音節語において、最後以外の音節に現れる場合は [ɜ] 程度で発音される⁷。
- /u/ 開音節の場合は [ʊ] と発音されることが多く、それ以外は [u] になる。
- /ɣ/ 舌位置は [ɣ] または [w] と [ɣ] の中間もしくはその前寄りの位置になる。

Sakar 方言の母音には、長短の対立、鼻母音/非鼻母音の対立が認められる。鼻母音には長短の対立は認められず、多くの場合短母音よりは長く長母音よりは短い半長の長さで実現される。鼻母音は/*Ṽ*/と表示し、/*Ṽ*/とは記述しない。鼻母音は末子音位置に鼻音の子音的要素を伴うことはない。

4.2 具体例

以下に短母音、長母音、鼻母音の具体例を掲げる。

短母音例	長母音例	鼻母音例
i ^h ni 火	^h ni: pɣ 眉毛	^h nĩ 心臓
e ^h tɕe lə ^h lje 舌	ˈse: pa 露	^h naw djẽ ほほ
ɛ ^h je ^h to? 支える	ˈje: taw 以上	^h pʰaj tʰjẽ 遅れる
a ^h za 虹	^h dzɑ: 昼食	^h ne wã 地獄
ə ^h ji gə 本	^h je: 借りる	^h na: nwẽ 手荒く扱う
ɑ ^h law 学ぶ	^h mbɑ: 埋める	^h tsã 刺繍する
ɔ ^h tɕə nə 短い	ˈtɕo: 衝突する	^h lɔ̃ つかむ
o ^h la mo 女神	ˈkʰa ^h bo: 霜	^h sõ 3
ɣ ^h tɕa pɣ 髪	^h ɣɣ: 銀	^h kʰɣ ^h dʰi ケーキ
u ^h shu 歯	ˈɣ pu: 体	ˈdũ 切れる
ʉ ^h tɕa ^h ma 猿	^h tɕu: tɕə 額	ˈmũ 霧
ə ^h shə lɕ: 種	ˈtə: 植物油	^h tɕə ^h ẽ ^h dzə まき散らす

⁷ 例によってはさらに舌位置が高くなり、[ə] で実現されることも珍しくない。このような場合には/*ə*/ と記述する。

5 子音

5.1 子音音素一覧

Sakar 方言の子音の一覧は次のようになる。

		両唇	歯茎	そり舌	硬口蓋	軟口蓋	声門
閉鎖音	無声有気	p ^h	t ^h	t ^h		k ^h	
	無気	p	t	t		k	ʔ
	有声	b	d	d		g	
破擦音	無声有気		ts ^h		tɕ ^h		
	無気		ts		tɕ		
	有声		dz		dʒ		
摩擦音	無声有気		s ^h	ʃ ^h	ç ^h		
	無気		s	ʃ	ç	x	h
	有声		z	ʒ	ʒ	ɣ	f
鼻音	有声	m	n		ɲ	ŋ	
	無声	m̥	n̥		ɲ̥	ŋ̥	
流音	有声		l	r			
	無声		l̥				
半母音		w			j		

5.2 具体例

子音は、初頭子音について単子音および子音連続に分けて具体例を挙げつつ考察する⁸。

5.2.1 単子音

単子音の具体例は、可能な限り 2 例ずつ挙げる。

閉鎖音・破擦音

Sakar 方言は基本的に閉鎖/破擦音に無声有気、無声無気、有声の 3 系列を有する。ただし、声門閉鎖音は/ʔ/の 1 つである。

そり舌閉鎖音系列/t^h, t, d/は、場合によって微弱な摩擦を伴う破擦音として実現されることが、その摩擦の弱さから破擦音とはみなせない。

有声音の系列はいずれも単子音としてはあまり見られず、語中に現れる例が多い。

	例語	語義	例語	語義
p ^h	ˈp ^h ɑʔ	ぶた	ˈp ^h i:	抜く
p	ˈpaj	印鑑	ˈpe:	(風が)吹く

⁸ 末子音としては、/ʔ, w, j/およびその組み合わせのみが認められるため、特にここでは議論しない。

b	ˈbə la	服	ˈbi: pa	蛙
t^h	ˈt ^h a: rə	縄	ˈt ^h o: lje	リス
t	ˈtaj pu	チーズ	ˈte ^h ka	きゅうり
d	ˈ ^h kaj daj	皿	ˈdū	切れる
t^h	ˈt ^h aʔ	血	ˈt ^h iʔ	世話をする
t	ˈta:	剃る	ˈti:	火であぶる
ɖ	ˈ ⁿ də ɣə ˈɖa	外見	ˈdzaw ɖa	聾啞者
k^h	ˈk ^h a:	雪	ˈk ^h e: ɲa ts ^h ěj	彼ら
k	ˈka ɲa	影	ˈkiʔ	しゃっくりする
g	ˈgē gu	老婦人	ˈgu kwəʔ ˈfi zu	曲げる
ʔ	ˈʔa ja	赤ん坊	ˈʔə ˈnɖə ˈtɕiʔ	ほとんど
ts^h	ˈts ^h aj mɣ	とげ	ˈts ^h ə	犬
ts	ˈtsaj ˈfi da	ひつつかむ	ˈtse nɑʔ	森
dz	ˈʔa rɑʔ ˈpō dza	酒かす	ˈtɕ ^h ɣ dzĩ	井戸
tɕ^h	ˈtɕ ^h a:	雨	ˈtɕ ^h i	何
tɕ	ˈtɕa nə	ありがとう	ˈtɕi:	斤
dz	ˈdzaw ɕ ^h uʔ	裏の	ˈdzaw ɖa	聴覚障害者

摩擦音

Sakar 方言は基本的に摩擦音に無声有気、無声無気、有声の3系列を有する。ただし、軟口蓋摩擦音および声門摩擦音には無声有気音がない。

	例語	語義	例語	語義
s^h	ˈs ^h a	地	ˈs ^h u	歯
s	ˈsa: rĩ	そば	ˈse: pa	露
z	ˈza	つるす	ˈzejʔ	ライオン
ʃ^h	ˈʃ ^h a	肉	ˈʃ ^h iʔ	しらみ
ʃ	ˈʃa: ˈ ⁿ dzə	チュバ	ˈʃiʔ	崩壊する
ʒ	ˈzɑ	虹	ˈzɪ pa pa	隠す
ɕ^h	ˈ ^{fi} dzaw ɕ ^h uʔ ˈɕ ^h a nã	退く	ˈɕ ^h i	開ける
ɕ	ˈɕa	鶏	ˈɕi: pa	商品
ʒ	ˈzi: pa	もの		
x	ˈxa ɲɖɣ	鬼	ˈxō xō	凹の
ɣ	ˈɣə na: ɖo	自分	ˈɣe: ɣə	夕方
h	ˈha ˈku	理解する		
fi	ˈfiə tɕa	ミルクティー	ˈfiō te ˈka: rō	おのおの

共鳴音

Sakar 方言は基本的に鼻音/流音に無声、有声の2系列を有し、半母音には有声の系列のみが認められる。ただし、/r/には無声音がない。/r/は音価が多様で、中でも [r, ɹ] といった発音がよく認められる。

	例語	語義	例語	語義
m	´ma:	バター	´mi sī	人民
m̥	ˉmã hwa	あざ		
n	´naj pa	耳	´now h̥pɤ	翼
n̥	ˉna	鼻	ˆnəʔ lje	ゆるい
ɲ	´ɲa mje	猫	ˉha ´ɲi gu	知らない人
ɲ̥	ˋɲi	火	ˉɲũ ma	竹
ŋ	´ɲa	私	ˉŋɛj	甘い
ŋ̥	ˉŋo sēj	青い	ˉŋĩ ɕwĩ	枕
l	ˉlaw tɕʰə	瀾滄江	´li: luʔ ˆjɯ:	動く
l̥	´la mo	女神	ˉl̥ɛ	はぐ
r	´ra	山羊	´ri: tʰõ	距離
w	´wa	キツネ	ˉwõ tɕʰɤ	汗
j	ˆja: kwõ	膨張する	ˆji gə	本

5.2.2 子音連続

Sakar 方言に見られる子音連続の組み合わせは比較的多いが、その組み合わせには大きく分けて主たる子音に先行する前鼻音と前気音、そして主たる子音に後続するわたり音に分けられる。わたり音と前2者は独立しているため、最大で3子音連続が認められる。

また、基本的に前鼻音・前気音と主たる子音の間の有声性は一致する。

なお、Sakar 方言の前鼻音は鼻音部の調音が弱いものと後続子音より強いものに分かれる。後者は少数例にのみ見られるが、発話速度が早い場合鼻音のみの発音になるという特徴がある⁹。

以下に子音連続の組み合わせを基準に分類して具体例を掲げる。

前鼻音

前鼻音は有声および無声有気閉鎖・破擦音および一部の流音に先行し、調音位置および有声性において一致するのが基本である。

有声音に先行するもの (^cC_i 型構造)

⁹ ただしこの現象は、鼻音の後続子音が脱落したのではなく、鼻音に同化したと分析できる。鼻音だけが聞こえる場合、その調音は単独の鼻音よりもやや長い。

^mb : ^mba: 埋める
ⁿd : ⁿdza: nəw 正午
ⁿd̥ : ⁿdu ⁿdu ボタン
^ŋg : ^ŋgo 頭
ⁿdz : ⁿdzaw li 世界
ⁿdʒ : ⁿdzo du 尻
ⁿl : ⁿlə wa / ⁿla ka 月 (天体)

有声音に先行するもの (CC_i 型構造)

^mb : ^mbaʔ お面
ⁿd : ⁿdu 弾
^ŋg : ^ŋgaj 鍛冶屋
ⁿdʒ : ⁿdze pu 美しい
ⁿdʒ : ⁿdʒa: 終わる

無声有気音に先行するもの

^mp^h : ^hbaʔ ^mp^he: 拝む
ⁿt^h : ⁿt^hũ mo 高い
ⁿt^h : ⁿt^huʔ 略奪する
ⁿk^h : ⁿk^hɔ̃ ma 家
ⁿts^h : ⁿts^hu 湖
ⁿtɕ^h : ⁿtɕ^hu: pa 唇

前気音

前気音は各種無声無気音および有声音に先行し、有声性において一致する。

無声有気音に先行するもの

^hp : ^hpõ ma 肩
^ht : ^hta 馬
^ht : ^htũ ^hma 猿
^hk : ^hka raʔ ベルト
^hts : ^htsa 脈
^htɕ : ^htɕĩ 小便
^hs : ^hsẽ ma 豆
^hʃ : ^hʃe: ほとばしる
^hɕ : ^hɕẽ mɤ 横の

h₁ : ^{-h}l̥ãw 靴

有声音に先行するもの

^hb : ^{-h}ba 首

^hd : ^{-h}dõ 顔

^hq : ^{-h}qə 蛇

^hg : ^hgõ t^ha: ハリネズミ

^hdz : ^{-h}dzẽ 火薬

^hdz̥ : ^{-h}dzẽ 秤

^hz : ^{-h}zẽ 袈裟

^hz̥ : ^hzã nã さきおととい

^hm : ^{-h}ma ja 孔雀

^hn : ^{-h}nə ma 息子の嫁

^hŋ : ^{-h}ŋi: tsə 目

^hŋ̥ : ^{-h}ŋ̥: 銀

^hl : ^{-h}lo ma 風

^hj : ^hje ^hmõ 花椒

わたり音

わたり音には/w/と/j/が認められる。いずれも語によっては発話速度が速い場合にわたり音部分が脱落することがあり、その存在は不安定である¹⁰。

/w/をもつもの

p^hw : ^{-s^h}ẽ p^hwõ 悔いる

p^hw : ^hpwoʔ 雨が降る

t^hw : ^hpə l̥õ t^hwo ra 牛小屋

t^hw : ^htwəʔ 毒

t^hw : ^ht^hwõ ku 私生児

t^hw : ^ht^hwõ zo ひじ

q^hw : ^hp^hu: qwi 鳩

k^hw : ^hk^hwəʔ 溝

k^hw : ^hkwa 電気を消す

g^hw : ^hgwõ kwəʔ 曲がる

¹⁰ なお、続く II の形態・統語で記述する例文では、わたり音の脱落した形式を記述する場合がある。それは語単独で発音する形式と、文中で発音する形式に異なりが認められるからであり、文中ではわたり音が脱落する形式のみが許容されるという事例も見られる。このゆれの要因は判明していない。

tɕw : ʼtɕwi k^hɔ̃ 監獄
s^hw : ʼs^hwə: lje 鋸
sw : ʼswɔ̃ 銅
zw : ʼzwe ʰtɕiʔ 1つの部屋
ʂ^hw : ʰʂ^hwɔʔ 力
ʂw : ʰʂa ʂwi 箸
ɕ^hw : ʰɕ^hwɔʔ 裕福な
ɕw : ʼɕwe: s^ha 用途
xw : ʼxwa 沸く
ɣw : ʼto ɣwa tɕu 傲慢な
hw : ʰmã hwa あざ
nw : ʰna: nwɔ̃ 手荒く扱う
ɲw : ʰɲwɔ̃ lje 軽い
lw : ʰlwɔʔ 綿羊
rw : ʰrwi rwi 若い

/j/をもつもの

p^hj : ʼp^hje: lje 子ぶた
pj : ʼpje チベット人
t^hj : ʰp^ha: t^hje 染料
tj : ʰp^haj ʼtjě 破壊する
dj : ʰs^ha dje マットレス
tj : ʼtje: ʱdɣ 玄米
ts^hj : ʰts^hje 命
ɕj : ʰɕjã de 休む
mj : ʼʂa mjě 母の兄弟の妻
m̩j : ʰm̩jě 薬
nj : ʼnjě pa 病人
lj : ʰlje: ka 危険
lj̥ : ʼja ljě 補修する

3子音連続

^hpj : ʰ^hpje: 線香
^mbj : ʰ^mbje: tɕa 鞭
mbj : ʰmbje 消える

^htʰj : ^htʰjɛ 吸い込む
^htj : ʼtsə ^htjɛ はさみ
^hdj : ^hdjɛ 7
^hlj : ^hlje ^hlje 猫
^hrj : ʼko ^hrje ごみ
^hdw : ^hdwəʔ いる
^hndw : ʼjɪ ^hndwɔ̃ 疑う
^hbw : ^hbwəʔ 空気
^hdw : ^hdwɔ̃ 梁
^htw : ^htwɔ̃ lɔ̃ こじき
^hdʷ : ^hdʷəʔ nɑʔ 八工
^hkw : ^hkwɔ̃ ma 足
^hgw : ʼkə ^hgwə 越える
^hgw : ʼpʰaj ^hgwə 開墾する
^htsʰw : ^htsʰwə 調理される
^htsw : ʼhʰtswo 集まる
^hdzw : ʼkə ^hdzwə どのように
^htɕw : ^htɕwəʔ ma 柳
^hndzʷ : ʼndzʷəʔ 鋤
^htɕw : ^htɕwəʔ ʼzwe dA 噛む
^hdzʷ : ʼdʰdzʷA 蚤
^hpj : ^hpjA よい
^hkj : ʼhʰkjɛ かぶせる

5.3 形態音韻論上の注意点

阻害音について、初頭子音が無声無気音¹¹でありなおかつ低声調はじまりの語は、接頭辞がつくとそれぞれの調音点の有声音と交替する。たとえば以下のようなものである。

	例語	語義	例語	語義
k - g	ʼha ʼku	分かる	ʼha ʼŋi-gu	分からない
tɕ- dz	ʼtɕw	着る	ʼŋi-dzɕw	着ない
s - z	ʼsa	食べる	ʼpə-za	食べなさい
ɕ- zɕ	ʼɕɔ̃	おいしい	ʼŋi-zɕɔ̃	おいしくない

¹¹ ただし対応する有声音のない *vɕ/* は除く。

II. 形態・統語

名詞、代名詞、数詞・量詞、形容詞、動詞、複文と動詞句の埋め込みに分けて述べる。格標識は名詞の項で、動詞句周辺の接辞は動詞の項で扱う。

適宜具体例を挙げつつ記述を行う。語釈つき例文には通し番号を与える。

6 名詞

6.1 形態

単音節語、2音節語が多い。派生語や複合語の場合、3音節や4音節で1語になっているものもある。

1. 単音節語

ˈnāw「空」, ˈsʰa「土」, ˈŋgo「頭」, ˈpʰaʔ「ぶた」

2. 2音節語

ˈfi lo ma「風」, ˈla hkwɑ「手」, ˈra ro「子供」, ˈʂʰej pʰõ「木」

3. 3音節語

ˈtə lʉ lʉ「トカゲ」, ˈhʰta: tã ɕa「ネックレス」, ˈzi pa lje「定規」

4. 4音節語

ˈfi dza ga ka ra「蜘蛛の糸」, ˈɕʰi mā kə loʔ「蝶」, ˈpə lɔ tʰwo ra「牛小屋」

3、4音節語の中には、2音節ごとに個別の声調を担うものもある。たとえばˈtsʰə tsʰa ˈjõ ˈdʷõ「ばった」, ˈmbɿ bu ˈɣwa mu「かたつむり」などがある。

6.2 名詞化標識

頻繁に見出される名詞化標識には、/mə/、/zə/、/sʰa/などがある。最初の2つは「こと・もの・人」の意味になり、最後のものは「ところ・道具・もの」の意味を表す。それぞれ生産的であり、また弁別的な声調を担わない。名詞化接辞が接続するにあたり、先行する語が1音節語の場合、/a/で終わる語は/a/になったり¹²、声門閉鎖音で終わる語は先行する母音が長母音化することがある。形容詞に専用の名詞化接辞/kə tə/もある。

名詞化される品詞は通常動詞または形容詞である。

名詞化前	名詞化後
ˈhʰtɕaʔ「担ぐ」	ˈhʰtɕa: mə「担ぐもの、担ぐ人」
ˈsa「食べる」	ˈsə zə / ˈsə sʰa「食べ物」
ˈhʰl̥ãw ˈhʰtsõ「靴を売る」	ˈhʰl̥ãw ˈhʰtsõ sʰa「靴屋」
ˈtɕʰɿ ˈfi lwɔʔ「水を入れる」	ˈtɕʰɿ lwɔ: sʰa「バケツ」
ˈsʰə sʰɛ:「黄色い」	ˈsʰə sʰɛ: kə tə「黄色いもの」

¹² これは音韻規則として成立しているとは言い切れない。そのため、5.3で触れてはいないが、実際の発音上高い頻度で実現される。注7も参照。

上の「靴屋」「バケツ」のように、複数の項を伴う節も名詞化することができる。また、次の例のように、疑問詞を含む節を名詞化し疑問文にすることができ、名詞化標識の後には格標識が接続する。

- (1) `tɕ^ha: ts^hɛj-φ `tɕ^hi-φ 'raʔ-de-mə-φ 'çe
 2.[複]-[絶] 何-[絶] する-[状態]-[名]-[絶] [判]
 あなたたちは何をしている人ですか？

節の表す動作が完了している場合、それを名詞化するときは/-ko:/（弱形に/-kə/もある）を用いる。ほかにも/-tɕiʔ/も用いられるが、用法の差異はよく分かっていない。

- (2) `k^hu-kə ^htsə-ko:-kə 'ni-zɔ̃-nə
 3-[能] 料理する-[名]-[主] [否]-おいしい-[現認]
 彼が料理したものはといえば、おいしくありません。

名詞化する節が目的の意味になる場合、/-s^ha/が用いられる場合がある。

- (3) 'pə lɔ̃-φ ^hte:-s^ha ^na: ts^hɛj-φ ^htswa-φ ^hŋa-de-çe
 牛-[絶] 与える-[名] 1.[複]-[絶] 草-[絶] 刈る-[状態]-[判]
 牛に与えるため、私たちは草を刈っています。

また、名詞化要素は修飾節になることができ、その際修飾句は被修飾語（句）の直前に特別な標識を伴うことなくおかれる。

- (4) `tɕ^huʔ-φ 'ŋa-φ ^hte:-mə ⁿdzə^htə-φ 'ŋa-rɔ̃-φ 'ŋu:-mə-kō rə
 2-[絶] 1-[絶] 与える-[名] 指輪-[絶] 1-自身-[絶] 買う-[名]-[比]
 ^jɑʔ-nə
 よい-[現認]
 あなたが私にくれた指輪は私が買ったものよりよいです。

6.3 格標識

Sakar 方言は、文法格として行為者をマークする能格型の格体系を持つ。

6.3.1 一覧表

形式	S/A/P 標示	非 S/A/P 標示
無標 (φ)	絶対格	位格
kə	能格	具格
tsə	与格	与格
kə / da		属格
nə		位格
ts ^h ə / tsə		奪格
kō rə		比較格

以上のうち、能格/具格はそれぞれ形態的に同一のものとして実現されうる。また、与格と奪格もまた通常の発話では同一となることがあるが、奪格は有気音で実現されるという異なりがある。ただし格の機能、そして格標識の脱落の可否において異なるため、分離して扱う。

一方、絶対格は無標であり、例文中に ϕ で示す。また位格もしばしば音形が省略され、絶対格と区別ができなくなるが、文中での役割が異なっている。以下の例文において、音形式の認められない位格は一律表示しない¹³。格標識の連続は認められないが、属格が「~のもの」を意味する場合、それは名詞化用法の一種と見られるが、その後ろには格標識は何も付加されない¹⁴。

そのほか、 $/-kə/$ は主題標識として用いられることもあり、この場合格標識とは共起しない。すなわち、絶対格もしくは位格につく。能格標識と同形であるが、発話において次の点で区別することができる。主題標識の $/-kə/$ は常に $[kə]$ というように初頭子音は閉鎖音であるが、能格/具格の $/-kə/$ は $[kə]$ のほかに発話によって $[\gammaə]$ と発音される。

なお、人称代名詞は特定の格について形態変化によって標示する場合がある。詳細は 7.1 を参照。

6.3.2 用法

以下、文法格 (S/A/P 標示)、非文法格 (非 S/A/P 標示) の順に、簡潔に用法を記述する。

文法格：絶対格

絶対格の用法としては、判断動詞の主語および補語、存在動詞の主語および所有者、自動詞の主語、他動詞の目的語 (被動者)、他動詞の主語 (行為者)、使役文における被使役者などがある。

判断動詞の主語および補語

- (5) $\text{'tʰu?}-\phi$ $\text{'kwɔ:}-\phi$ 'ʧe
2-[絶] 誰-[絶] [判]

あなたは誰ですか？

存在動詞の主語および補語

- (6) $\text{'ŋa}-\phi$ $\text{'hsə mə}-\phi$ $\text{'ni-}^n\text{dwo?}$
1-[絶] 妹-[絶] [否]-[存]

私には妹がいません。

自動詞の主語

- (7) $\text{'tʰa:}-\phi$ $\text{'po?}-\text{tʰe}$
雨-[絶] 降る-[近接未来]
雨が (間もなく) 降るでしょう。

他動詞の被動者および行為者

¹³ 時間 ($/'ʔa\ rĩ/$ 「今日」、 $/'n\ ts^h\bar{e}\ rĩ/$ 「夜」など)・空間 ($/'h\ t̄/$ 「上」、 $/'sɔ:/$ 「下」など)を表す語は、品詞としては名詞の一種と考えられるが、格標識を伴わない形式は通常意味上は位格として用いられると考え、絶対格の標示を行わない。

¹⁴ 文の構造上、この種の属格は絶対格におかれていると分析できるかもしれないが、本稿では絶対格の記述を行わない。

- (8) ʼŋa-φ ʼfio ma-φ -^ht^hɕ
 1-[絶] 牛乳-[絶] 飲む
 私は牛乳を飲みます。

使役文における被使役者¹⁵

- (9) ʼŋa-φ `tɕ^huʔ-φ ʼsē-φ ʼsa-tɕoʔ-t^hɕ
 1-[絶] 2-[絶] ごはん-[絶] たべる-させる-終える
 私はあなたにごはんを食べさせました。

- (10) ʼŋa-φ ^hgwə-tɕoʔ-roʔ
 1-[絶] 行く-させる-してください
 私に行かせてください。

文法格：能格

能格は他動詞の主語（行為者）を示すが、通常はあまり用いられず、行為者を強調したり対比したい場合に特に用いられる。ただし行為者が被動者より後に来る場合¹⁶は、ほぼ義務的に用いられる。

行為者が文頭にある場合

- (11) ^hni-kə `tɕ^huʔ-φ ʼpə sē-φ -^hte:
 1-[能] 2-[絶] 食事-[絶] 与える
 私があなたに食事をおごりましょう。

行為者が被動者より後に来る場合

- (12) ^htjē naw-φ ^hni-da ʼʔa wo-kə jɛ:^hzu-tɕiʔ ^hɕu:nə
 パソコン-[絶] 1-[属] 兄-[能] 修理する-[名] 完了する-[現認]
 パソコンは私の兄によって修理され終わっています。

行為者のみが発話に現れる場合

- (13) {ʼŋa-φ/^hni-kə} `^htsə-wə
 {1-[絶]/1-[能]} 料理する-[意思未来]
 私が料理しましょう。

文法格：与格

文法格としての与格は、一部の他動詞の感情の向く対象を示す際に用いられる。この場合の与格標識は通常省略されない。

- (14) -^hjw^hq^hwĩ-φ `k^hu-tsə `^hni^h k^ha-de-reʔ
 [人名]-[絶] 3-[与] 腹を立てる-[状態]-[判]
 ユドゥンは彼に腹を立てています。

¹⁵ 使役文における動詞が自動詞でも他動詞でも、被使役者は絶対格で標示される。

¹⁶ この語順の場合、日本語では受け身で訳すほうが意味的に近いと考えられる。

非文法格：属格

属格は所属、属性を表す際に用いられる。中立の属格標識は/kə/で、人物が所有者となる場合、/kə/のほかに/ke fia/という形式も用いられるが、差異は不明である。人称代名詞の場合、形態変化のみで属格を表すことがある。

- (15) ʔa ʃ^{hi}-{kə / ke fia} ʃə gə
[人名]-[属] 本
タシの本

- (16) ʔni: ʔruʔ
1.[属] 友人
私の友人

代名詞、人名および人間を表す普通名詞には/da/も属格として用いられ、「～の家の、～のところの」の意味をもつ。

- (17) ʔni-da ʔp^huʔ
1-[属] ぶた
私の家のぶた

一方、属格で終わる句は、「～のもの」という名詞句として用いることができる¹⁷。

- (18) ʔni-da ʔa wo-φ ʔ^hɔ ma-φ ʔrə rə ʔni: ʔ^hɔ ʔ^hɔ da-reʔ
1-[属] 兄-[絶] 身長-[絶] それぞれ 1.[属] 同じである-[判]
私の兄は身長が私の（身長）とそれぞれ同じくらいです。

- (19) ʔnə-φ ʔ^hts^hu mu-ke fia ʔreʔ
これ-[絶] [人名]-[属] [判]
これはツモのものです。

非文法格：具格

具格は道具、手段、材質および原因を示す際に用いられる。能格標識と共通の形態であるが、能格と異なり脱落する（絶対格になる）ことはない。

次の例は、主題標識、能格標識、具格標識のすべてのタイプの/kə/が用いられている。

- (20) ʔnəj tci ʔ^hgāw-kə ʔ^hdo ʔ^hdzi-kə ʔ^htɕaʔ-kə ʔ^hzu-raʔ-ko:φ ʔreʔ
あれ 箱-[主] [人名]-[能] 鉄-[具] 作る-する-[名]-[絶] [判]
あの箱は、ドジが鉄を用いて作ったものです。

道具

- (21) ʔtɕ^huʔ-φ ʔjɜ: luʔ-kə ʔa ʃō-φ ʔ^hzō-de-ja
2-[絶] 左手-[具] 箸-[絶] 持つ-[状態]-[疑]
あなたは左手で箸を持つのですか？

材質

¹⁷ 人名に後続する形式は/ke fia/になるのが通例である。

- (22) ˈma-φ ˈsʰej-je ˈzɯ-nɔŋ
 これ-[絶] 木-[具] 作る-[目撃証拠]
 これは木でできています。

原因

- (23) ˈpej tsə-φ ˈfi lo ma-kə ˈhpje-tci? ˈtɯ:-nə
 コップ-[絶] 風-[具] 倒れる-[名] し終わる-[現認]
 コップが風で倒れてしまい、倒れたままになっています。

非文法格：与格

非文法格としての与格は、受益者・受領者および行為の向かう先を示す際に用いられる。これらの場合の与格標識は文脈が明瞭であれば省略されることがしばしばある。

受益者・受領者

- (24) ˈtɕʰiʔ-φ ˈkʰɤ-tsə ˈpō mɸɤ ˈhtciʔ-φ ˈpə-hte:
 2-[絶] 3-[与] プレゼント 1-[絶] [方]-与える
 あなたは彼にプレゼントをあげなさい。
- (25) ˈŋa-tsə ˈfi go ˈdzi-φ ˈɕʰi-de-ro?
 1-[与] 門-[絶] 開ける-[現在状態]-してください
 私のために門を開けてください。

行為の向かう先

- (26) ˈŋa-φ ˈtɕʰiʔ-tsə ˈpje ˈgu -hta
 1-[絶] 2-[与] 話す
 私はあなたに話しましょう。

非文法格：位格

位格は無標の位置・方向を示す。文意が明快な場合は省略可能で、しばしば絶対格として現れる。

- (27) ˈkʰu-φ ˈji xā-nə ˈɕʰi ˈŋɯ:-φ ˈkə ˈndze: ˈfi ja:kʰə-re?
 3-[絶] 銀行-[位] 資金-[絶] いくら 借りる-[完了]-[判]
 彼は銀行で資金をいくら借りたのですか？
- (28) ˈpʰaʔ ra-nə ˈpʰaʔ li-φ ˈme tsʰe ˈni-nɔwə?
 ぶた小屋-[位] 子ぶた-[絶] 以外 [否]-[存]
 ぶた小屋には子ぶた以外いません。
- (29) ˈʔa ko tsʰej-φ ˈshō ˈni ˈrə-nə ˈhku la ˈŋgu
 1 (複数/包括) -[絶] 明日 山-[位] コルラに行く
 私たちは明日山をコルラしに行きます。

また、/ˈhtē/「上」など空間を表す1音節の語は、名詞に後続するとき声調のかかる範囲が直前の名詞と同一になり、それ自体の独立の声調を担わない点で、格標識へ文法化が進行してい

ると考えられる。

- (30) ʔo: tsə-htē p^hã tsə-φ ʔla: ^{fi}gu: reʔ
 テーブル-上 皿-[絶] 置く-必要である-[判]
 テーブルの上にお皿を置く必要があります。

非文法格：奪格

奪格は時間・空間の起点を表す。奪格標識には初頭子音について有気無気の異なる2つの形態が認められるが、自由変異かどうかは不明である。

- (31) ʔŋa-φ s^hə ka: ts^hə h^hpeʔ fiō-jī
 1-[絶] [地名]-[奪] 来る-[判]
 私は斯嘎村から来ました。

非文法格：比較格

比較格は比較対象を表し、起点を示す場所格の一種と考えられる。

- (32) ʔa mje-φ ʔa ^{fi}dza-kō rə h^hpe: h^hteiʔ nə ^{fi}dzoʔ
 祖父-[絶] 祖母-[比] ちょっと 太っている
 おじいさんはおばあさんよりちょっと太っています。

- (33) ^{fi}dō ma-φ ʔla mu-kō rə se: ^hdzoʔ-nə
 [人名]-[絶] [人名]-[比] 言う 速い-[現認]
 ドマはラモより話すのが速いです。

以上のように、比較される程度を表す語（たいていは形容詞）は文末に置かれる。

7 代名詞

人称代名詞、指示詞、疑問詞類に分けて述べる。

7.1 人称代名詞

人称代名詞は、人称と数が区別される。

人称	単数	複数	双数
1	ʔŋa	ʔa ko ts ^h ēj [包括] ʔŋa: ts ^h ēj [排除]	ʔa ko `mə [包括] ʔŋa: mə [排除]
2	ʔt ^h uʔ	ʔt ^h a: ts ^h ēj	ʔt ^h a: mə
3	ʔk ^h u	ʔk ^h e: ŋa ts ^h ēj	ʔk ^h ŋ ŋa: `mə

「性」は区別されない。「双数」は「複数」の形式に数詞「2」を付加して表すことができ、それ以外の数も現れうる。「敬称」は認められない。1人称複数および双数には「包括」「排除」の区別がある。文意が明快であれば、各複数形の最後の音節は脱落することが可能である。

各人称の単数は、格標識を伴うと代名詞語幹の形態が変化するほか、場合によっては形態変化のみで表し、次のようになる。

格	1人称単数	2人称単数	3人称単数
絶対格	ʼŋa	ʼtɕʰuʔ	ʼkʰu
属格独立形	ʼni:	ʼtɕʰiʔ	ʼkʰɤ
格標識を伴うとき	ʼni-	ʼtɕʰiʔ-	ʼkʰɤ-

7.2 指示詞（修飾形式を含む）

指示詞は近称と遠称の区別があり、事物（人も含む）と場所の異なる系列がある。

	近称	遠称
事物	ʼnə / ʼn də / ʼkʰu	ʼtə kʰu / ʼnəj tɕi
場所	ʼnəj ka / ʼkʰu na	ʼpʰa na / ʼpʰaj na

/ʼkʰu/は3人称代名詞と同形であり、語義としては既知の事物に対する「それ」が近いと考えられる。

複数の事物を示す形式に、/ʼkʰɤ na: [tə, ʼnə kʰɛ]/「これら」、/ʼtə kʰɛ/「あれら」がある。

様態の指示詞には、/ʔa ʳda/「このような、あのような」がある。

- (34) ʼn də-φ ʼpʰaʔ lə-φ ʼreʔ
 これ-[絶] 子ぶた-[絶] [判]
 これは子ぶたです。

指示詞は代名詞の機能と形容詞の機能を兼ねる部分がある。指示形容詞として用いる場合、/ʼn də/「この」と/ʼnəj tɕi/「あの」が修飾対象の名詞に前置される。指示形容詞は独立の声調を持つ。また、これが単なる指示形容詞として用いられるときに後置される例は認められない。

7.3 疑問詞類（形容詞・副詞も含む）

ʼkwə 「誰」

ʼtɕʰi 「何」、ʼtɕʰi sʰe fia 「何の、どんな」、ʼkə ʳde 「どの」

ʼka: 「どこへ」、ʼka: tsʰə 「どこから」¹⁸

ʼkə lɕə 「いつ」、ʼnāw 「いつ」

ʼkə ʳdzwə 「どう（する）、どのような方法で」

ʼkə lɕə 「どれぐらい、いくら」、ʼkə ʳdze: 「いくら」

「なぜ」にはいくつかの表現があり、たとえば/ʼtɕʰi ʼjəʔ-tʰe:/（直訳は「何がありましたか」）といった表現が「なぜ」に相当すると考えられる。

複数のものについて尋ねる場合、疑問詞を重複させて表すことができ、その場合疑問詞はそれぞれ声調を担う¹⁹。

- (35) ʼtɕʰiʔ-da ʼkwə ʼkwə ʼn dwoʔ
 2-[属] 誰 誰 [存]
 あなたの家族はだれだれがいますか？

¹⁸ /ʼka:/「どこ」+ 奪格/tsʰə/に由来する。

¹⁹ それゆえ、疑問詞の重複は動詞や形容詞に見られる文法化した重複と異なるものとする。

疑問詞は、次のような文では疑問を表さない²⁰。

- (36) ʼnāw-ze ʰtoʔ ʼnāw-ze ʼsa
 いつ-[?] 飢える いつ-[?] 食べる
 おなかがすいたときに、そのときに食べます。/おなかがすいたら食べなさい。

8 数詞・量詞

8.1 基数詞

以下に 1 から 29 までの形態を示す。

		+10	+20
0		- ^h tɕɤ	ʼnə ɕ ^h ɤ
1	ʰtɕiʔ	ʰtɕo: tɕiʔ	ʼnə ɕ ^h ɤ - ^h tsa: ^h tɕiʔ
2	ᵐmə	- ^h tɕo: mə	ʼnə ɕ ^h ɤ - ^h tsa: mə
3	- ^h sō	- ^h tɕo: sō	ʼnə ɕ ^h ɤ - ^h tsaw ^h sō
4	ᶿzə	- ^h tɕo: ᶿzə	ʼnə ɕ ^h ɤ ʰtsəw zə
5	ᶿŋa	- ^h tɕɛ: ᶿŋa	ʼnə ɕ ^h ɤ - ^h tsa: ᶿŋa
6	- ^h tɕwəʔ	- ^h tɕi ^h tɕwəʔ	ʼnə ɕ ^h ɤ ʰtsə ᶿdɕwəʔ
7	-ᶿdjē	ʰtɕɛu: djē	ʼnə ɕ ^h ɤ ʰtsəw djē
8	ᶿdziʔ	ʰtɕɛu: dziʔ	ʼnə ɕ ^h ɤ - ^h tsaw dziʔ
9	-ᶿgɤ	ʰtɕɛ: gɤ	ʼnə ɕ ^h ɤ ʰtsa ᶿgɤ

20 台の数は「20 + つなぎの要素/^htsa/²¹ + 1 の位」で表し、「30」以降のきりの悪い数字も 20 台と同様の構成をとる。

30 から 100 までのきりのよい数は以下のようになる。

- ^hɕō tɕ^hɤ 「30」
- ʼzə ^htɕɤ 「40」
- ᶿŋāw tɕɤ 「50」
- ʼtɕwə: tɕɤ 「60」
- ᶿdjē ^htɕɤ 「70」
- ᶿdzi: tɕɤ 「80」
- ᶿgɤw tɕɤ 「90」
- ᶿdza 「100」

「100」から「199」までは「100 + 各種 2 けたの数」を並列して構成する。「200」は/ʼnə ᶿdza/ となる。「1000」以上の数は以下のようなものがある。

- ^htō t^ha 「1000」
- ^hə t^ha 「10000」
- tō 「1 億」

²⁰ /-ze/の意味はまだ分かっていない。

²¹ 後続の 1 の位によって若干形式が異なる。

8.2 序数詞

序数詞は基本的に基数詞に^hŋgo/を先行させることによって形成されるが、「第2」は^hŋgo^hŋə/となる点に注意が必要である。

8.3 量詞

量詞は大きく類別詞と計量の単位（度量衡の単位を含む）に分けられるが、前者は Sakar 方言には認められず、名詞（句）に直接数詞を後続させることができる。また、度量衡の単位は漢語をそのまま用いることが多い。

量詞を含む語順は「名詞 + 量詞 + 数詞」である。何らかの容器による単位を表す場合、「1」に/^hkwō/が用いられる場合がある。また「1」が^htci?/のとき、場合によっては [tci?] と発音されることがある。

(37) ʼmə {^htci? / ʼmə}
 人 { 1 / 2 }
 1人の人 / 2人の人

(38) ʼʔa raʔ ʼp^hi ^htci?
 酒 瓶 1
 1瓶の酒

(39) ʼʔa raʔ ʼte ʼkwō
 酒 升 1
 酒 1 升

9 形容詞

Sakar 方言において、形容詞は状態を表す動詞と考えることができるが、名詞を修飾する構造が形容詞に独特であるので、ここで述べる。

9.1 形態

形容詞の形態としては、以下のようなものが代表的である。

1. 1音節語幹

ʼts^ha: 「熱い」_ト、^htç^hɑʔ 「寒い」_ト、^hka 「苦い」

2. 1音節語幹の重複

ʼtç^hɿ tç^hɿ 「小さい」_ト、^hxō xō 「凹の」_ト、ʼna na 「黒い」

3. 2音節語

^ht^hũ mo 「高い」_ト、ʼni mō 「多い」_ト、^hsə: kwa 「明るい」

重複タイプは、必ずしも第1音節と第2音節の音形式が同じになるとは限らない。また、重複それ自体は形態の一特徴であり、特別な意味機能があるわけではない。

9.2 用法

形容詞は単独で述語になることができる。2音節以上からなる形容詞で、語末が接尾辞/po, mo/で終わるものは、述語用法のとき末尾音節が脱落する。語幹の重複形式のものは、重複を行わないこともある。その形式に動詞句末接辞を付加することもできる。

- (40) ʔa-φ ʔmo: h̥co: h̥t̥ciʔ ʔs̥h̥a-φ ʔsa ʔn̥õ
 1-[絶] 通常 肉-[絶] 食べる 少ない
 私はふつう肉を食べることは少ないです。

- (41) ʔa-φ ʔh̥se ma ʔsh̥e ga
 1-[絶] とても うれしい
 私はとてもうれしいです。

一方で形容詞に判断動詞が後続することも認められる。この場合は形容詞末の/po, mo/は脱落せず、重複形は重複形のままである。

- (42) ʔa rĩ ʔni ma-φ ʔh̥se ma ʔjaʔ po ʔce
 今日 太陽-[絶] とても よい [判]
 今日は天気がとてもいいです。

形容詞の程度を強調するには、以上のように/ʔh̥se ma/「とても」を用いるか、または語幹を重複させて表すことができる。

文中で修飾語として用いられる場合、形容詞は被修飾名詞に後置されるのを基本とし、数詞は形容詞に後続する。

- (43) ʔa-φ ʔbə la ʔh̥kə h̥kaj ʔh̥t̥ciʔ-φ ʔjəʔ
 1-[絶] 服 白い 1-[絶] [存]
 私は1着の白い服を持っています。

形容詞の名詞化は接尾辞/nə/を用いる。

- (44) ʔA-φ ʔʔA mjẽ-nə-φ ʔni-n̥d̥u:
 1-[絶] 小さい-[名]-[絶] [否]-必要である
 私は小さいのは必要ないです。

比較級に相当する表現は、形容詞に/ʔt̥chi/「大きい」を後続させて作ることができる。この際、/ʔt̥chi/は直前の形容詞とは独立した声調を担う。

- (45) ʔh̥aj ts̥h̥õ ʔh̥t̥ch̥aʔ ʔa rĩ ʔh̥t̥ch̥aʔ ʔt̥chi-n̥õ
 昨日 寒い 今日 寒い 大きい-[目撃証拠]
 昨日は寒かったですが、今日はもっと寒いです。

「もっとも～」を表すには、形容詞の直後に/wa/を置く。

- (46) ʔa ko ts̥h̥ej ʔsh̥e rĩ ʔlu t̥chi wa ʔh̥ta s̥h̥i-φ ʔreʔ
 1(複数/包括) 間 もっとも年長である [人名]-[絶] [判]
 私たちの中でもっとも年上なのはタシです。

形容詞の述語用法では常に状態を表し、状態変化は動詞/ʔe:/を用いて表す。

- (47) ʼnə ma-φ ʼhpu ji ʼmə mə: ʼlei-xə-çõ
 葉-[絶] みんな 赤い なる-[完了]-[体験]
 葉はみんな赤くなりました。

10 動詞

動詞の分類、動詞を取り巻く接辞、動詞連続、使役・態に分けて述べる。

10.1 分類

動詞は述語動詞と本動詞に分けることができる。

10.1.1 述語動詞

述語動詞には、判断動詞と存在動詞がある。これらは単独用法のほかに動詞句末接辞として置かれて動詞句を形成する要素にもなる。これらには後述の TAM 接辞はつかない。

判断動詞および存在動詞の一部には、語幹そのものに肯定と否定の2種がある。以下に一覧表を掲げる。

	肯定	否定
判断動詞	ʼçe	ʼmẽ
	ʼreʔ	ʼma-reʔ
存在動詞	ʼjəʔ	ʼɲeʔ
	ʼŋõ	ʼɲi-ŋõ
	ʼ ⁿ dwəʔ	ʼɲi- ⁿ dwəʔ

判断動詞の/ʼçe/と/ʼreʔ/の使い分けは、前者が発話内容に話者自らが関連づけられているときに用いられ、そうでない場合は後者が用いられる²²。

- (48) ʼŋa-φ ʼpje-φ ʼçe
 1-[絶] チベット人-[絶] [判]
 私はチベット人です。

- (49) ʼk^hu-φ ʼp^haʔ-φ ʼreʔ
 3-[絶] ぶた-[絶] [判]
 それはぶたです。

不確定な事柄についての話者の判断や話者個人の感想を述べる場合、判断動詞は/ʼçe/が選択され、なおかつ動詞句末標識を伴うことができる。

- (50) ʼp^haʔ li-φ ʼna naʔ ʼçe-ŋõ
 子ぶた-[絶] 黒い [判]-[不確実] 注²³
 (おそらく)子ぶたは黒いでしょう。

²² 判断動詞の用例については、例文(1), (10), (17), (34)も参照。

²³ この発話は、「父ぶたが白く、母ぶたが黒い場合、その子ぶたは何色になるか?」という問いに対する答えである。事実が起こっていないため、推測を述べている。

- (51) ʔ^hu-φ ʔ^hse ma ʔ^ho ʔaj ʔ^hce-nō
 3-[絶] とても かわいい [判]-[目撃証拠]
 彼女はとてもかわいいと思います。

存在動詞については、/ʔ^hoʔ/は主に所有および話者のよく知っている事物の存在を表し、/ʔ^hnō/は見て知っている非人物の存在を表し、/ʔ^hdwəʔ/は人物の存在を表すのが基本的な用法といえる。ただし、後2者の使い分けは話者によって判断基準が異なり、話者の管理下にある有生物(家畜なども含む)に/ʔ^hdwəʔ/を用いる話者もいる²⁴。

- (52) ʔ^hna-φ ʔ^hpʔ-φ ʔ^hjeʔ
 1-[絶] ぶた-[絶] [存]
 私はぶたを持って(飼って)います。

- (53) ʔ^hpʔ rə-φ ʔ^hso tsə-htē {ʔ^hjeʔ/ʔ^hnō}
 碗-[絶] テーブル-上 [存]
 碗はテーブルの上にあります。

- (54) ʔ^hrə ʔ^hgo ʔ^hʔ^hĩ pʔũ-φ ʔ^hnō
 山の上 木-[絶] [存]
 山の上に木があります。

次のように、話者がその存在をよく知っているが見えない場合は/ʔ^hjeʔ/が選択される。

- (55) ʔ^hgāw-nə ʔ^hbə la-φ {ʔ^hjeʔ/*ʔ^hnō}
 箱-[位] 服-[絶] [存]
 箱の中には服があります。

存在動詞の否定は、必ずしも肯定形の否定の意味とならず、話者のよく知っている事柄には/ʔ^hneʔ/が、今知った事柄や話者自らにかかわりのない事柄には/ʔ^hni-nō/が用いられる。

- (56) a ʔ^hlāw-φ ʔ^hneʔ
 道 [否/存]
 道は(そもそも)ありません。
 b ʔ^hlāw-φ ʔ^hni-nō
 道 [否]-[存]
 道は(以前はありましたが今はなくなって)ありません。

なお、本動詞/ʔ^hdeʔ/「いる、住んでいる」も意味的に有生物の存在表現として用いられる²⁵。

- (57) ʔ^hna-φ ʔ^hkō tɕa ʔ^hdeʔ-nə
 魚-[絶] たくさん いる-[現認]
 魚がたくさんいます。

なお、述語動詞の場合の完全疑問文は、疑問接頭辞/ʔ^ha/を付加して形成することができる。

²⁴ 存在動詞の用例については、例文(2), (25)も参照。

²⁵ /ʔ^hdeʔ/「いる」を本動詞とするのは、たとえば10.2.4で扱うTAM接辞が付加できることによる。TAM接辞は存在動詞にはつかない。

- (58) ʔp^hã tsə-φ ʔa-nõ
皿 [疑]-[存]
お皿はありますか？

10.1.2 本動詞

動詞の形態としては、次のようなものが代表的である。

1. 1音節語幹

ʔ^ht^hwɔ̃ʔ「飲む」_⊥ ʔ^hkwə「耕す」

2. 語幹（音節数を問わない）+ ʔraʔ²⁶「する」

ʔe: ʔraʔ「働く」_⊥ ʔ^hgeʔ raʔ「賭ける」

/ʔraʔ/に先行する部分には漢語の動詞がそのまま挿入されることがある。

本動詞の語幹自体は無変化であるが、命令形と非命令形で語幹が異なる動詞がある。

語義	非命令形	命令形
行く	ʔ ^h gwə	ʔ ^h õ
来る	ʔ ^h õ	ʔ ^h oʔ

また、動詞の要求する項の数とその格標示の観点から、次のような分類が可能である。

1. 自動詞（主語は絶対格；形容詞の述語用法もここに含まれる）

ʔ^hgwə「行く」_⊥ ʔ^hɣ「泣く」

2. 他動詞（行為者は能格か絶対格、被動者は絶対格）

ʔ^hu:「買う」_⊥ ʔ^htə「書く」

3. 他動詞：感情動詞（感情を抱く主体は絶対格、感情の向く対象は与格か絶対格）

ʔ^hdã「愛する」_⊥ ʔ^hĩ k^ha「腹を立てる」

10.2 動詞につく音節を有する接辞

動詞に付加され、かつ音節を有する接辞には、以下のものがある。

1. 接頭辞：否定辞、疑問接辞、方向接辞
2. 接尾辞：TAMを表す接辞、動詞句末接辞、疑問接辞

これらは付加される本動詞とともに1つの声調範囲に入る。接頭辞には特定の声調の型が認められ、本動詞の声調にかかわらず音節初頭の高低が決定される。第2音節末の高低は本動詞の性格によって決まる。

なお、動詞語幹が複音節からなる場合、多くの場合最終音節に接辞類を付加する。ただし重複語幹の場合は必ず動詞第1音節に先行する位置に接頭辞がつくが、その際接頭辞だけが単独の声調を担うことがある。

²⁶ 先行する語幹が1音節の場合、語幹と1つの声調範囲を形成する場合がある。

10.2.1 否定辞

否定辞には、以下の2種がある。

1. 未完了否定：´ni-
2. 完了否定：´ma-²⁷

(59) a ´ŋa-φ ´ŋẽ ´ni-ç^hẽ-çe
1-[絶] 聞く [否]-理解する-[判]
私は聞いて理解できません。

b ´ŋa-φ ´ŋẽ ´ma-ç^hẽ-çõ
1-[絶] 聞く [否]-理解する-[判]
私は聞いて理解できませんでした。

完了否定は禁止命令²⁸にも用いられる。

(60) ʔa^hkwa-kə ´sẽ-φ ´sa ´ma^hdeʔ
手-[具] ごはん-[絶] 食べる [否]-いる
(直接) 手でごはんを食べてはいけません。

10.2.2 疑問接辞

疑問文を形成する接辞は接頭辞と接尾辞がある。ただし両者は共起しない。

接頭辞・接尾辞ともに1種類ある。

1. 接頭辞：ʔa-
2. 接尾辞：-jĩ / -ja / -jə²⁹

接頭辞は動詞語幹に他の接頭辞がつかない場合に限って現れる。動詞が TAM 接辞を伴う場合、疑問接頭辞は動詞語幹ではなく TAM 接辞の直前にも現れうる。接尾辞は文末に置かれる。両者の差異は明確ではない。

(61) ʔa^hʔ-φ ʔi su-φ ʔa-jĩ
2-[絶] リス族-[絶] [疑]-[判]
あなたはリス族ですか？

(62) ʔde: ʔra: k^howʔ-φ ʔ^htçuʔ-xə-mə-φ ʔa^hʔ-φ ʔreʔ-jĩ
この さかずき-[絶] 壊す-[完了]-[名]-[絶] 2-[絶] [判]-[疑]
このさかずきを壊したのはあなたですか？

選択疑問文の場合は疑問接尾辞が用いられ、最後におかれる選択の要素に付加されるものを除き/-ja/で現れる。/-ja/には強勢が置かれる。

²⁷ 完了否定の´ma-/はしばしば [´mə] と発音される (6.2 参照)。

²⁸ 禁止命令の´ma-/は常に [´ma] と発音される。完了否定か禁止命令かは文脈によって決まる。

²⁹ これらは文中における環境や強勢の置き方による異形態と考える。

- (63) ʔtɕʰuʔ-φ ʰdʒi: dõ ʳgwə-rə ʔʰa tsə ʳdoʔ-ja ʔfej tɕi ʳdoʔ-jə
 あなた-[絶] [地名] 行く-とき 車 座る-[疑] 飛行機 座る-[疑]
 あなたは香格里拉に行くとき、車に乗りますか？それとも飛行機に乗りますか？

10.2.3 方向接辞

方向接辞と考えられる要素には、次の5種類がある³⁰。

1. 上方：ʔjɛ:
2. 下方：ʔɕa
3. 向心：ʔtsʰəj
4. 離心：ʔpʰaj
5. 中立：ʔpə

中立以外の接辞は、通常移動動詞に付加され、移動の方向を示す。向心・離心の基準点は、通常発話者に置かれるが、特定の環境ではその特定の場所を中心とみなした用いられ方をする³¹。また、特定の動詞と結びついて直接方向とは関係のない慣用的な表現もあるが、その場合は方向接辞と共通の要素は独立した声調を担う場合があり、ふるまいが異なる。

- (64) a ʔja-φ ʔja-ʳgwə
 1-[絶] [方]-行く
 私は上へ行きます。
- b ʔja-φ ʔɕa-fiō-ɕe
 1-[絶] [方]-来る-[判]
 私は下りてきます。
- c ʔtɕʰuʔ-φ ʔtsʰəj-fiō-za
 2-[絶] [方]-来る-[未来/疑]
 あなたがこちら（話者のほう）へ来ますか？
- d ʔja-φ ʔpʰaj-fiō-za
 1-[絶] [方]-来る-[未来/疑]
 私がそちらへ行きますでしょうか？

中立の接辞は、肯定の命令形を形成するときに用いられる文法化した範疇であると考えられる。丁寧な命令には用いられない。

- (65) ʔsē-φ ʔpə-za
 ごはん [方]-食べる
 ごはんを食べなさい。

³⁰ 「中立」の方向接辞は以下に解説するように、純粹に方向を示すものではないが、接辞それ自体のふるまいや他の方向接辞とも共起しない点を考慮し、方向接辞と同列に扱うことにする。

³¹ たとえば、「家」の中への移動には向心が、外への移動には離心がそれぞれ用いられる。また、囲炉裏の周辺について上座と下座の区別をする話者は、話者がどこにいるかにかかわらず、上座を基準点にとる。

なお、/pə-/は形容詞にも付加されて「その状態にしる」という命令文を作る。

- (66) ʔbə la-φ ʔpə-hkūw
服 [方]-乾いた
服を乾かしなさい。

10.2.4 TAM を表す接辞群

動詞語幹の後部には TAM を表す接辞がつく。この接辞は動詞句に付加され複数の要素が共起することはないと見られるが、動詞句末接辞の部分において話者の発話に対する態度 (M) を表現することができる。動詞句末接辞を伴わなくても文を終止することができる。述語動詞(存在動詞)・本動詞・形容詞に共通して付加できるものと、どれかに限定されるものに分かれる。

動詞句を否定する場合は否定辞(接頭辞)が本動詞につく場合と、動詞句末接辞に否定形を用いる場合がある。疑問文の場合は疑問接頭辞は TAM を表す接辞につくことがあり、その場合本動詞とは異なる声調範囲を形成する。

なお、接辞を伴わず動詞語幹で発話が終止する例も見られ、その場合は通例意思を持ってその行為をするという意味を帯びる。

- (67) ʔŋa-φ ʔraʔ
1-[絶] する
私がしましょう。

Sakar 方言における TAM の全体像は明確に記述できる段階に至っていないが、少なくとも次のような枠組みが認められる。

1. 時制(時間の直示): 現在・過去・未来
2. 完了性: 継続・非完了・完了
3. 証拠性: 判断・目撃証拠・直接知覚

これらのうち、証拠性と完了性の一部は動詞句末接辞が担う。

TAM を表す接辞群には以下のようなものが確認されている。

-ze (未来): 本動詞のみ

この形式はしばしば/-ze:/と発音される。疑問接尾辞がこの要素に直接後続する場合、/-za/と縮約することがある。

- (68) ʔtə^huʔ-φ ʔka: ʔŋgwə-ze
2-[絶] どこへ 行く-[未来]
あなたはどこへ行きますか?

-tci / -^htci (近接未来): 本動詞のみ

- (69) ʔna:-φ ʔ^hpu ji ʔⁱdzi: dō ʔŋgwə-^htci-jī
1(複数)-[絶] みんな [地名] 行く-[近接未来]-[判]
私たちは(間もなく)香格里拉に行くでしょう。

-wə (意思未来): 本動詞のみ

- (70) ʔa-φ ʰta sʰi-φ ʰi dō-wə
 1-[絶] [人名]-[絶] 叩く-[意思未来]
 私はタシを叩いてやろう。

-de (現在状態・進行): 本動詞のみ

主に動作を表す動詞につき、動作の進行中であることを表す³²。

- (71) ʔa-φ kʰwa:φ ʰi zu-de-jī
 1-[絶] パン-[絶] 作る-[現在状態]-[判]
 私はパンを作っているところです。

また、/-de/は動詞の表す行為の結果状態を表すこともある。

- (72) ʰnə ʰtsə-kə ʰla mu-kə ʰsʰi ʰdzəʔ-kə ʰi dō-de
 これ 犬-[主] [人名]-[能] 棒切れ-[具] 殴る-[現在状態] 注³³
 この犬は、ラモが棒切れで殴りました(だからぐったりしています)。

/-de/は存在動詞/ʔəʔ/³⁴に後続する事例が認められる。

- (73) ʰkʰu-φ ʔa ta ʰcju ci ʔəʔ-de-nə
 3-[絶] 今 休憩 [存]-[状態]-[現認]
 彼は今休憩しているところです。

-kʰə / -xə (完了): 本動詞・形容詞

- (74) ʰkʰu-φ ʰtsʰaj-φ ʰnɛ: xə-cō
 3-[絶] 野菜-[絶] 買う-[完了]-[体験]
 彼は野菜を買いました。

-ʰtse (持続): 本動詞のみ

- (75) ʰtʰi-φ ʰrɔ: ʰcʰe-ʰtse-nə
 ガス-[絶] まだ 開く-[持続]-[現認]
 ガス(の元栓)はまだ開いたままです。

10.2.5 動詞句末接辞

動詞句末接辞は本動詞語幹もしくは TAM 接辞に後続し、主として発話に対する発話者のさまざまな態度の表明を担う。1つの動詞句において複数の動詞句末接辞が通常共起することはないとみられる³⁵。動詞句末接辞に後続しうるのは疑問接尾辞に限られる。動詞句を名詞化する名詞化接辞とは共起しない³⁶。疑問文形成時に疑問接頭辞を用いる場合は動詞句末接辞に付加され、動詞語幹と異なる声調範囲を形成する。

³² 進行中であることを強調する場合は、動詞句末接辞の/-ⁿdwoʔ/が用いられる。

³³ この例文では、「犬」が主題化されているため、「ラモが今殴っている」という解釈はとりづらい。もちろん、犬の目線で発話すれば成立しうが、不自然である。

³⁴ この場合の/ʔəʔ/は存在動詞の用法として用いられているわけではなく、特定の漢語の語彙とともに用いられ、「その状態にある」ということを意味する。しかし語釈は[存]で統一する。

³⁵ 若干例外的なものがあるため、それについては後に解説する。

³⁶ 動詞句末というが、実際は形容詞句にも付加される。9.2の例も参照。

動詞句末接辞は、述語動詞の複数の形式と共通するが、それ以外に独自のものもまた若干認められる。判断動詞は、それがコピュラとして用いられる時と同様、発話が発話者と関連づけられている場合には/-çe/がつき、それ以外の判断を表す場合には/-reʔ/がつく³⁷。否定形は動詞句末接辞/-mĩ/を用いて動詞句を否定することができるほか、本動詞に否定辞/ma-/を付加して/-çe/または/-reʔ/をつける構造も認められる³⁸。この接辞が TAM 接辞を伴わず動詞語幹に付加されるときは、過去/完了の意味となる。存在動詞については、各種肯定形すなわち/-jəʔ/、/-ŋõ/および/-ⁿdwəʔ/³⁹ および否定形として/-ⁿiⁿdwəʔ/⁴⁰ が動詞句末接辞として用いられる⁴¹。

-çe :

(76) ʔŋa-φ ʔruʔ-da ^{fi}de-de-çe

1-[絶] 友人-[属] 泊まる-[状態]-[判]

私は友人の家に泊まっています。

(77) ʔŋa-φ ʔni ma ko ^hte ʔts^hə-nə ʔjə gə-φ ʔma-tə-çe

1-[絶] しばしば 家-[位] 手紙-[絶] [否]-書く-[判]

私はしょっちゅう家に手紙を書きませんでした。

(78) ʔt^huʔ-φ ʔjə gə-φ ʔʔa-tə-çe

2-[絶] 手紙-[絶] [疑]-書く-[判]

あなたは手紙を書きましたか？

-mĩ :

(79) ʔŋa-φ ʔni mo: ʔsa-ze-mĩ

1-[絶] たくさん 食べる-[未来]-[判/否]

私は(こんなに)たくさん食べきれません。

-reʔ :

(80) ʔ^khu ma ʔsē sa-s^ha-φ ʔjəʔ-reʔ

ここ ごはんを食べる-[名]-[絶] [存]-[判]

ここには食堂(ごはんを食べるところ)があります。

-jəʔ :

/-jəʔ/は動作が習慣的に行われることを示す。

(81) ʔŋa-φ ʔnə ʔbə la ^hse ma-φ ʔtɕu: -jəʔ

1-[絶] この 服-[絶] とても 着る-[状態]

私はこの服をよく着ます。

完了の否定辞のついた本動詞とともに用いられると、「まだ～していない」の意味になる。

³⁷ これらには、判断動詞と同じ語釈 [判] をあてる。

³⁸ /ⁿi-/はつかない。言い換えれば、/ⁿi-/のついた動詞句とこの種の動詞句末接辞は共起することができない。

³⁹ 通常は [ʔdwəʔ] と発音される。

⁴⁰ /-ⁿiⁿdwəʔ/は独自の声調を担う。

⁴¹ これらは「存在」を表さないため、語釈としてはそれぞれ [状態]、[目撃証拠]、[進行]、[進行/否] をあてる。

- (82) ʼŋa-φ ʼsē-φ ʼma-za-jəʔ
 1-[絶] ごはん-[絶] [否]-食べる-[状態]
 私はまだごはんを食べていません。

-ŋō :

/-ŋō/は見て確認したこともしくは今見ている状況について用いられる場合と、発話に対して不確実であるときに用いられる場合がある⁴²。そのため、1人称主語の場合には用いられにくい。

- (83) ʼtɕʰuʔ-φ -mbaʔ ʼhɕoʔ-ŋō
 2-[絶] 今 吐く-[目撃証拠]
 あなたは今吐いています。

-ⁿdwəʔ :

/-ⁿdwəʔ/は発話の行為が現在進行中であることを強調する場合に用いられる。

- (84) ʼŋA-φ -mbaʔ ʼ^hzu-ⁿdwəʔ
 1-[絶] 今 する-[進行]
 私は今(準備を)している最中です。

-nə :

発話の内容を実際確認して知っている場合に用いられる。

- (85) ʼŋa-φ ʰse ma ʼtsʰa:-nə
 1-[絶] とても 暑い-[現認]
 私はとても暑く感じます。

疑問文で用いられるときは、話者の聞き手に対する感じた印象を表すことになる。

- (86) ʼtɕʰuʔ-φ ʼtɕʰeʔ ʼʔa-dəʔ-nə
 2-[絶] 疲れる [疑]-なる-[現認]
 あなたは疲れませんか？

-təʔ :

発話の直前に起きた事柄を表す。

- (87) ʼŋa-φ ʼtu ji ʼhɕiʔ-φ ʼtē-təʔ
 1-[絶] 考え 1-[絶] 思う-[直前過去]
 私は1つ考えを思いつきました。

-cō :

通常は発話者(1人称)の体験、感想、および何らかのかかわりのある出来事が起こったことを表す。言外の状況を含めて用いられるため、1人称代名詞が文中に現れるとは限らない。

- (88) ʼŋa-φ ʼtɕʰi nə-φ ʼhpu ji ʰha ʼma-gu-cō
 1-[絶] 何も-[絶] まったく [否]-理解する-[体験]
 私は何もまったく分かりませんでした。

⁴² このため語釈は前者の場合[目撃証拠]とし、後者の場合[不確実]とする。

- (89) ʔᵏᵈu bu-φ ʔᵏpe:-ε̃
 客-[絶] やって来る-[体験]
 お客さまがやって来ました。

ただし、まったく1人称にかかわらない発話にも用いることがあり、その場合はその文の主語の体験・経過を表すと考えられる。

- (90) ʔᵏᵕ-φ ʔᵏᵕ ba-φ ʔᵏᵕ:-xə-ε̃
 3-[絶] 家-[絶] 買う-[完了]-[体験]
 彼は家を買いました。

以上のほか、推測を表すものとして/-tə/があるが、この形態素にはさらに動詞句末接辞がつき、以下のようになる。

- (91) ʔᵏᵕʔ-φ ʔᵏᵕʔ-tə-ᵏᵈwəʔ
 2-[絶] 疲れる-[推測]-[進行]
 あなたは疲れたでしょう。

10.3 動詞連続

各種動詞語幹は特別な形態的手続きを加えることなく並列することで、動詞連続を形成することが可能である。その際、動詞の接辞類は最後の要素につく。動詞連続は移動を伴う動作を表現するものや、第1の動詞の表す語義に付加的な意味合いを与えるものがある。

前者の場合は各動詞が独立した声調をもつ。たとえば次のようなものがある。

- (92) ʔᵏᵈzəʔ ʔᵏᵒwə-ze-ε̃
 見物する 行く-[未来]-[判]
 (私たちは)見物しに行きましょうか?

- (93) ʔᵏᵕʔ-φ ʔᵏᵕaj ʔᵏᵕə-sᵕᵕ
 2-[絶] 持つ [方]-行く 注⁴³
 (あなたはこれを)持っていきなさい。

後者の場合、第2の動詞に接頭辞を伴わない限り動詞連続は1つの声調範囲の中にある⁴⁴。また、以下に言及する要素は共起可能であり、その中で「経験がある」「し終える、し終わる」が最も後ろにくる。その後ろには動詞句末接辞が付加されうる。

ʔᵏᵕ⁴⁵ 「経験がある」

- (94) ʔᵏᵒa-φ ʔᵏᵕo ʔᵏᵕ-φ ʔᵏᵕᵕ-ᵏᵕ
 1-[絶] そして 3-[絶] 出会う-経験がある
 私と彼は出会ったことがあります。

⁴³ 「行く」の命令については、先行する動詞の表す動作と同時に「行く」の意味を表す場合、方向接辞として/ʔᵏᵕə-/が用いられる。「～しに行く」の場合は現れない。

⁴⁴ この場合、2つの動詞は-でつないで表される。

⁴⁵ この語の単独使用は未確認である。

ʰhɯ: / -tʰə⁴⁶ 「し終える、し終わる⁴⁷」

- (95) ʰnda: -nə ʲŋa-φ kʰwaj tsʰaj mjẽ-φ ʲsa-tʰhɯ:
昼-[位] 1-[絶] カップめん-[絶] 食べる-し終える
お昼に私はカップめんを食べました。

- (96) ʲŋa-φ ʲpiʔ hʰtci-φ -hʲɔwʔ ʲtə rə ʲlu ʲmə ʲre: -tʰhɯ:
1-[絶] チベット語-[絶] 学ぶ 以来 年 2 経る-し終わる
私はチベット語を学んで2年がたちました。

- (97) ʲtʰhɯʔ-φ ʲsa ʲʔa-tʰhɯ:
2-[絶] 食べる [疑]-し終える
あなたは食べ終えましたか？

-tʰəʔ⁴⁸ 「させる」

- (98) ʲtʰhɯʔ-φ ʲkʰu-φ ʲsẽ-φ ʲsa ʲʔa-tʰəʔ-tʰhɯ:
2-[絶] 3-[与] ごはん-[絶] 食べる [疑]-させる-し終える
あなたは彼にごはんを食べさせ終えましたか？

-ʰi gɯ: 「必要である」

- (99) ʲto: tsə-hʰtẽ ʲpej tsə-φ ʲla: ʲŋi-ʰi gɯ: -reʔ
テーブル-上 コップ-[絶] 置く [否]-必要である-[判]
テーブルの上にコップを置く必要はありません。

-tʰh'oʔ 「してもよい、できる」

- (100) ʲto ma-φ ʲsa-tʰh'oʔ-reʔ
アリ-[絶] 食べる-できる-[判]
アリは食べることができます。

-ŋdzɑ: 「なくなる、終える」

- (101) ʲŋa-φ ʲrɑʔ-ʰi gɯ: -mə ʲŋa rɔ̃ na rɔ̃-φ ʲrɑʔ-ŋdzɑ: -tʰhɯ:
1-[絶] する-必要である-[名] 私自身-[絶] する-なくなる-し終える
私がすべきことは、私自身し終えました。

ʲroʔ 「してください⁴⁹」

- (102) ʲtʰa-φ ʲnʰtʰɔ̃-roʔ
茶-[絶] 飲む-してください
お茶をお飲みください。

ほかに、-tʰhẽ 「知っている」、-pʰoʔ 「あえてする」、-ʰi dā 「好きだ」などがある。

⁴⁶ /-tʰə/は特に発話の途中に現れる。

⁴⁷ 先行する動詞が自動詞でも他動詞でもつく。語釈は本動詞の性格によって決まる。単独で本動詞として用いられる場合、「終わる」の語義になる。/tʰə/という形式は独立して現れることはない。

⁴⁸ この語の単独使用は未確認である。

⁴⁹ この語は本来「助ける」という語義をもつ。丁寧な命令にのみ用いられる。音声的な変異として、[ro:, ruʔ, ru:]なども見られる。

10.4 使役・態

使役文は先に触れた動詞¹tcəʔ「させる」を用いて形成される。動詞語幹に特定の接辞を付加して使役動詞を形成する形態論的手続きは未確認である。使役の動詞が何であれ、使役者も被使役者も絶対格で標示される。

受動態に関しては特定の表示手段がない。意味上は動作主および被動者の語順によってどちらに焦点をあてるかを定めることができる。

11 複文と動詞句の埋め込み

ここでは、複文の形式と動詞句の埋め込みについて用例を掲げる。

2つの文で述べられる事象が継起的であったり、分かりやすい因果関係にであったりする場合、特に接続詞を用いることなく文を並列させることによって表すことができる。逆接の場合は/²nə rə/「しかし」などが入る。

順接の例

- (103) ʔkʰə nō ʔkʰa:-φ ʔpoʔ-tʰə ʔlāw-φ ʰse ma ʔ^hdəʔ-reʔ
 昨晚 雪-[絶] 降る-し終わる 道-[絶] とても 滑る-[判]
 昨晚雪が降り、(今はやんでいますが)道はとても滑りやすいです。

- (104) ʔⁿdə ʔjə gə-kə ʔ^hje:-ko:-φ ʔmē ʔŋa-rō-φ ʔⁿu:-ko:-φ ʔce
 この 本-[主] 借りる-[名]-[絶] [判/否] 私-自身-[絶] 買う-[名]-[絶] [判]
 この本は借りたものではなく、私自身が買ったものです。

逆接の例

- (105) ʔʔa ta ʔtʰeʰa:-φ ʔpoʔ-ʔⁿi ⁿdwəʔ ʔⁿə rə ʔtʰeʰe ^hdwəʔ-φ ʔ^htʰeʔ ʔkʰa ʔtsʰa:
 今 雨-[絶] 降る-[進行/否] しかし 雨傘-[絶] 1 持っていく
 ʔjaʔ-reʔ
 よい-[判]
 今は雨が降っていないですが、雨傘を持っていくのがよいです。

文と文をつなぐ接続詞については、/³kʰə re/「~のとき」、/⁴hte: rə/「~のとき」、/⁵nɪ ma ʔŋa/
 「~する前に」、/⁶sə rə/「~ではあるけれども」などが認められる⁵⁰。

- (106) ʔŋa-φ ʔ^he tsə ⁿdwəʔ ʔkʰə re ʔ^hdzo: ʔ^hoʔ ʔkʰa:-φ ʔpoʔ-ⁿdwəʔ-reʔ
 1-[絶] 車 [存] とき 外 雪-[絶] 降る-[進行]-[判]
 私が車に乗っていたとき、外は雪が降っていました。

- (107) ʔŋa: tsʰēj-φ ʔs̄ə kʰo ʔhte: rə ʔsʰə ŋgɻ ʔŋga:-kə-ʔs̄
 1(複数)-[絶] 授業を受ける とき 地震-[絶] 揺れる-[完了]-[体験]
 私たちが授業を受けていたとき、地震が起きました。

⁵⁰ 名詞句どうしをつなぐ接続詞として、/⁷do/「そして」がある。

(108) ʔa rĩ ʔja-φ ʔlẽ kʰa-φ ʔpʰaj ruʔ ʔni ma ʔna ʔja-φ ʔtsʰə-nə
 今日 1-[絶] 仕事-[絶] し終える 前に 1-[絶] 家-[位]
 ʔpʰaj ʔni-ŋgwə
 [否]-帰る

今日私は仕事をし終えるまで家へ帰りません。

(109) ʔna: mə-φ ʔdeʔ-sʰa ʔse ma ʔdze:-reʔ ʔsə ra ʔma tciʔ
 1.[双]-[絶] 住む-[名] とても 近い-[判] けれども あまり
 ʔni-tʰeʔ-reʔ
 [否]-会う-[判]

私たち2人は住んでいるところがとても近いですが、あまり会いません。

動詞句が「尋ねる」「知っている」「言う」などの動詞の補文になるときは、従属文に何ら標識を伴わず埋め込み、最後に主たる動詞をもってくるタイプが多く見られる。ほかにも、会話などでは主たる動詞に続いて補文の部分を連続させる方法も認められるようである。ただし、「言う」については動詞の形式が /ʔse:/ではなく、/ʔsə/となり、しばしば動詞句末接辞 /-tɑʔ/ を伴う。

(110) ʔkʰu-φ ʔni-tsə ʔja-φ ʔta: ʔka: ʔndwəʔ ʔtə-çõ
 3-[絶] 1-[与] 1-[絶] さっき どこに [存] 尋ねる-[体験]
 彼は私に私がさっきどこにいたのか尋ねてきました。

(111) ʔtɕʰuʔ-φ ʔkʰu-φ ʔtɕʰi-φ ʔse: ʔha ʔʔa-gu-nə
 2-[絶] 3-[絶] 何-[絶] 言う 分かる-[疑]-[現認] 注⁵¹
 あなたは彼が何を言ったか分かりましたか？

(112) ʔkʰɤ-kə ʔa rĩ ʔsə ji haw-φ ʔreʔ ʔsə-tɑʔ
 3-[能] 今日 11日-[絶] [判] 言う-[直前過去]
 彼は今日が11日だと言いました。

⁵¹ この文では TAM 標識も時間を表す語もついていないため、「何を言っているか分かりますか」とも解釈可能である。

略号表

文法機能語で略号を作らないものは直接 [] の中に機能を書き込んでいる。複数の略号が重なるときは / で区切って示す。

[絶]	絶対格	[複]	複数
[能]	能格	[双]	双数
[与]	与格	[量]	量詞
[属]	属格	[判]	判断動詞
[位]	位格	[存]	存在動詞
[内]	内格	[否]	否定辞
[具]	具格	[方]	方向接辞
[奪]	奪格	[疑]	疑問接辞
[比]	比較格	[主]	主題標識
[名]	名詞化標識		

参考文献

- 鈴木博之 (2005) 「チベット語音節構造の研究」『アジア・アフリカ言語文化研究』第 69 号 1-23
—— (2009b) 川西地区“九香線”上の藏語方言：分布與分類 《漢藏語學報》第 3 期 17-29
—— (2010) 「カムチベット語燕門/斯嘎 [Yanmen/Sakar] 方言の方言特徴」『ニダバ』第 39 号 78-87
—— (2011) 嘎嘎塘藏語的咽化元音與其來源 《語言暨語言學》第 12.2 期 477-499
Suzuki, Hiroyuki (2009a) Introduction to the method of the Tibetan linguistic geography — a case study in the Ethnic Corridor of West Sichuan —, in : Yasuhiko Nagano (ed.) *Linguistic Substratum in Tibet — New Perspective towards Historical Methodology (No. 16102001) Report* Vol. 3, 15-34, National Museum of Ethnology
吳光范 (2009) 《迪慶・香格里拉旅遊風物誌—沿著地名的線索》雲南人民出版社
朱曉農 (2010) 《語音學》商務印書館

[付記]

筆者による Sakar 方言の言語資料収集に関する現地調査については、以下の援助を受けている。

- 平成 19-21 年度日本学術振興会科学研究費補助金（特別研究員奨励費）「川西民族走廊・チベット文化圏における少数民族言語の方言調査と地域言語学的研究」
- 平成 21-22 年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究 (A) 「ギャロン系諸言語の緊急国際共同調査研究」(研究代表者：長野泰彦、課題番号 21251007)